読売教育賞

最優秀賞に杉浦さん、鈴木さん

「五十三回読売教育賞」の受賞者が決まり、二十三区からは、社会科教育部門で杉並区の区立和田中学教諭の杉浦元一さん(31)と、幼児教育・保育部門で練馬区の大泉南義学園ほうや幼稚園副園長の鈴木朋子さん(38)が最優秀賞に輝いた。また、優秀賞には算数・数学教育部門で世田谷区の筑波大付属駒場中学副校長の井上光さん(57)と、美術教育部門で千代田区の共立女子中学教諭の中城芳絵さん(46)がそれぞれ選ばれた。

中学生に職業意識を

前任の足立区立第十一中で、進路選択を迫られている三年生を対象に電力会社員や公認会計士、米穀店主、専業主夫らをゲストに招いて、体験を語ってもらう「社会に一歩踏み出す教室」を開いた。

「夢を持てない」と言われる現代っ子たちに「学ぶことの意味や将来について具体的に考えてもらいたかった」という。

ゲストに職業を選択した理由や仕事内容、一日の生活パターンを聞いた上で、「『電柱をどけろ』とクレームが入った時はどうするか？」、「十円のコメを売る場合、米穀店に入る利益は？」などを生徒に考えさせ、その職業を身近に感じてもらえるようにした。

三年間で招いたゲストは約四十人。生徒は「将来について考えるようになった」「物事を考える力がついた」などと感想を述べるようになったという。杉浦さんは「部活や進路指導に追われ、大変な時もあったが、生徒が成長する姿を目にすると、続けなければと思った」と振り返る。

今は和田中で一年のクラス担任をしている杉浦さんは「受賞は予想していなかったのでうれしい。こうした取り組みが広がってくれれば」と期待している。

中学生に対する職業指導が評価された杉浦元一さん

母親が語らう場提供

園児の母親たちが自由に語り合える場「子育てを考える会」を六年前、園内に立ち上げた。

一九九六年から二年間、大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター（千代田区）に研修生として通い、心理学を学んだことがきっかけとなった。この十年間で、子育てによるストレスを抱える母親に接する機会が増えた。悩みを聞いているうちに発散の場を提供しようと考えた。

現在、メンバーは約三十人。毎週月曜日午前十時から正午まで、園内の空き教室に集まり、鈴木さんが年数回に分けて出す課題について語り合っている。

これまでに参加した母親は、計約二百人に上る。卒園後、小学校で読み聞かせの会を開いたり、地元で育児サークルを立ち上げる母親も出てきているという。

母親同士が子育てを考える場を作った鈴木朋子さん

優秀賞の2人

二年生を対象に、鏡に映った自分を正確に表現する普通の自画像でなく、将来の夢や不安、楽しかった過去の思い出など、その時に自分が心に抱えている思いに見合う場所や空間、時間を設定して描く「想定自画像」に取り組んでいる。作品は、背景が海だったり、頭上に月が浮かんでいたりと様々。

二年生に限るのは、中学生活の中で一番不安定な時期を過ごしていると考えられるから。「じっくり自分を見つめ直し、個性を発揮するいい機会になっている」と語る。

自分見つめる自画像 ＊ 中城さん

数学の面白さ伝える ＊ 井上さん

「受験数学を教え込むばかりではなく、まずは数学の面白さを伝えることから始めなければならない」

二十数年前から、夏休みや冬休みの課題として、数学や科学の入門書を読ませ、読書感想文を提出させてきた。その内容を分析した結果、中学一年では本の内容をなぞっただけのものが多かったが、学年が進むことに、「数学の面白さ」を訴えたり、専門的な記述が自立ったりするようになったという。「生徒の自主性を生かした学習の必要性を訴えていきたい」と語った。

めた。就任拒否により、担当教員がいなくなった授業については、別の教員を割り当てる。

バス旅行の32人 弁当で食中毒

製造業者今年2度目

都は二日、先月二十七日に都内から日光などへ行った日帰りバス旅行の参加者三十二人が食中毒を発症したと発表した。このうち台東区の主婦(75)が入院したが、快方に向かっているという。原因は、板橋区向原二の「サンブランチ」が製造した弁当。同社は今年一月にもバス旅行の弁当で二百三十三人の食中毒を発生させていた。

ヴェルディ初戦は岩手のFC手代森

第二十八回全日本少年サッカー大会（読売新聞社と主催）の組み合わせが二日、日本サッカー協会で発表された。大会は八月一日から七日まで、東京・味の素スタジアムなどで行われる。

都代表のヴェルディの戦チームは次の通り。

▽三日＝FC手代森（岩手）、八万SC（徳島）▽四日＝高田FC（奈良）

東京新大学野球春季リーグ戦（2日、さいたま市